
異聞現代里見八犬伝

花月

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

異聞現代里見ハ犬伝

【NZコード】

N0067Z

【作者名】

花月

【あらすじ】

時は現代。 現代に生きるハ犬士のうち一人が里見家当主の下に居たが、ついに恐れていたことが起きる。 玉梓の封印が解け始めてしまったのだ。 里見は再びハ犬士を集めることを犬塚信乃と犬川莊介に命じるのだった。

プロローグ 何でもない一日（前書き）

- ・この小説はフィクションです。実在する人物、団体、地域、出来事などとは切り離してお考えください。
- ・誹謗中傷等はお辞め下さい。

プロローグ 何でもない一日

嘉吉元年、結城合戦で敗れ安房に落ち延びた里見義実は、滝田城主、神余光弘を謀殺した逆臣山下定包を、神余旧臣・金碗八郎の協力を得て討つ。義実は定包の妻、玉梓の助命を一度は口にするが、八郎に諫められてしまう。玉梓は「里見の子孫を地獄に落とし、煩惱の犬にしてやる」と呪詛の言葉を残して処刑された。

時は過ぎて長禄元年、里見領の飢饉に乗じて隣領館山の安西景連が攻めてきた。落城を目前にした義実は飼犬の八房に「景連の首を取つたら娘の伏姫を与える」と言つ。八房は景連の首を持参して戻つて来てしまう。八房は他の褒美に目もくれず、義実にあくまで約束の伏姫を求め、伏姫は君主が言葉を翻すことの不可を告げ、八房と共に富山に入る。

富山で伏姫は読経の日々を過ごす。翌年、伏姫は山中で出会った仙童から、八房が玉梓の呪詛を負つていたこと、読経によりその怨念は消されたものの、八房の気を受けて子を宿したことが告げられる。懷妊を恥じた伏姫は、折りしも富山に入った金碗大輔・里見義実の前で切腹し、胎内に犬の子がないことを証明する。切腹した傷口から流れ出た白気は伏姫のつけていた数珠を空中に舞い上げ、仁義八行の文字が書かれた八つの玉を飛び散らせてしまう。

「仁・義・礼・智・忠・信・孝・悌」のどれか一文字書かれた玉をもつており、尚且つ姓に「犬」が入っている人物が八人揃い、里見八犬士、と言われるようになつた。

そして、時はあれよあれよという間に過ぎてゆき

。

現代の日本 とある小さな村。

縦横せいぜい五キロといった土地に所狭しと田園と民家、小さな商店街、さらには雑木林があるという、田舎を通り越してド田舎という土地に、それ 里見家はあった。この土地で権力を一番権力をもつのは里見家だが、昔の伝説には遙か遠く及ばない。ただそれでも、かつて有名だったこともあり村では異色を放つ古びた洋館に手伝いを連れた里見家当主と “現在の” ^{いま}ハ犬士の一人が住んでいた。

古びた洋館の一室、十畳程度の部屋に並べられた本棚の一角に、十代後半らしき少女は持っていた古い本を押し入れるようにして納める。本にはいやに綺麗な筆文字で里見ハ犬伝、と書かれていた。少女は題名の部分を人差し指で一撫ですると意味もなく息を吐き出した。

傷一つ無い、部屋の窓から差し込む太陽の光を反射する黒髪は太腿まで及んでおり、目も一点の汚れもない黒色で肌は透き通つており白く、目鼻立ちはすつきりしており、端整で女子とわかる顔だちながらも、凛とした気の強さを表しているようだ。

名を犬塚信乃。^{いぬづか しの}現代ハ犬士の一人で、「考」の玉を持っているといつより、体内に埋め込まれている、もしくは封印されているといった表現が正確だ。

「うーん、どれも役に立ちそうのはないわね」

信乃是溜息を吐いた。

現在わかっている現代のハ犬士は自分を含めて一人。後一人は村には居るが、里見とは犬猿の仲、というよりはあちらが勝手に嫌っているだけの者だった。信乃より年上でありつつ子供っぽいところもあるが、何かと頼りにしている。……が、あちらが里見を嫌っているので、出来るだけあちらからはこの洋館に近付いてこよつとはしない。

「時間が無いっていうのに」

信乃是思わず愚痴混じりに咳き、ハツとして頭を振る。

実はあの里見ハ犬伝の悪役というか、そもそもその発端の張本人である玉梓は死に追いつめることはできずに、長い間封印されていたが、何百年という時が経つにつれ、封印が薄まつてしまつている。玉梓が復活すれば何をしでかすかわからない。

それ以上に、玉梓の妖怪という名の部下が何処でどう聞きつけたのかこれは好機と動き始めているのだ。今は村の中で、しかも死者を出さずにおさえられているがいつ死者が出て、妖怪が村の外へ手を出すかわからない。

（なんとしても皆を護らなければいけないのに）

それは信乃が自身でたてた誓い。

未だ三歳にも達していない頃、村のこの洋館前に自身はネームプレート共々置かれていたと里見に聞いた。小さな村だ。信乃と里見が血縁者で無いこと、また、信乃の親はこの村には居ないことその話はすぐに村中に知れ渡つた筈なのに、誰一人そんな差別はせず温かく接してくれた。

護りたい。そんな思いが芽生えるのも、当然だつたと思う。だけど信乃ともう一人では力が足りないのも辛いことだが事実。だから、一刻も早く仲間を集めようとしていた。

だから里見ハ犬伝について少しでも触れられた本の置かれたこの部屋にやつて来ているのだが、一向に手がかりになりそうなものはない。数百年の間に玉は形を変え、ついにはハ犬士の心臓と一体化し、左胸部分に玉の文字と牡丹の痣が現れた。それゆえ他人の目に見えにくくわからぬため、もしかしたら本人以外誰もハ犬士とは気が付かなかつたのかもしれない。

「どうすれば良いんだろう」

その咳きに答える者は居ない。かわりに、毎日変わらない声がドアの外から信乃を呼んだ。

「信乃——！ 学校行きましょう！」

幼馴染の浜路はまじだ。また家に上げることを渋つていた里見をうまくはぐらかして上がり込んだに違いない。小さく里見の困ったような

声が聞こえてきている。

「今行く

信乃は里見の困ったような表情を黙々と浮かべて、苦笑しつつ部屋のドアを開けた。

これは何もない平和な一日の、ほんの一コマ。

プロローグ 何でもない一日（後書き）

後書き

初めまして。花月と申します。
里見八犬伝を見て「これだ！」と思つて授業中に書き殴つた
ものを大幅に訂正したものがこれです。
因みに教師には見つかってキツイ説教を食らつたとかいう後日談
がつきます。

初挑戦、これからどうなるかわかりませんが、温かい目で見て頂
ければ幸いです。

途中で打ち切る、というのは個人的にどうしても避けたいです。
そのためにはグダグダにならないう、精進せねば……！と思
つております。

これから宜しくお願ひします。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n0067z/>

異聞現代里見八犬伝

2011年11月30日16時54分発行